

## 駒ヶ根市文化財

名称	菅の台の七名石
種別	民族・芸能
所在地	赤穂北割一
説明	<p>駒ヶ根高原の菅の台、切石公園には、切石・重ね石・地藏石・袋石・小袋石・ござ石・蛇石（へびいし）と名の付いた石があり、七名石と呼んで里人に親しまれてきた。高遠藩の儒者中村元恒（もとつね）が著わした『伊那志略』には、奇勝としてこのうち疱瘡石（ほうそういし）（重ね石）・地藏石・小袋石があがっている。</p> <p>切石は、刃物で縦に切ったように真二つに分かれており、武蔵坊弁慶（坂上田村麻呂ともいう）が試し切りしたとか伝えられていて、切石原・切石公園の名称の起源となっている。</p> <p>重ね石は、横に切ったように二つ重なり、重なり目に一本松が生えている。下の石の表面がぼくぼくしているところから疱瘡石と呼び、また傍らの石に蚕玉様を祀ってあるので蚕玉石ともいう。この石を擦ると疱瘡を病んでも軽くて済むと言われた。</p> <p>地藏石は、石を穿って子育（こそだて）地藏が祀ってあり、「明和八年十一月二十四日 願主西安」と刻まれている。西安（せいあん）は北原の水上家の内庵にいた行者と伝えている。（明和8年は1771年である）</p> <p>袋石は、遊水池の中にある、米をいっぱいつめた穀袋（こくぶくろ）の形をしている。</p> <p>小袋石は、小袋井の北岸にある。</p> <p>ござ石は、切石遊水池取入口の北西にあり、表面が平らで、ござの目に似た筋がついている。</p>



切石



重ね石



地藏石

## 駒ヶ根市文化財

蛇石は、駒ヶ池の南、山林の中にあり、蛇のような形をしている。

これらの巨岩を七名石と呼んでいる。七名石の中の「切石巨礫群」(切石・重ね石・地蔵石・袋石)は、最終氷期中期の約6万年前に、中央アルプス山麓に堆積した土石流巨礫群である。

巨岩(木曾駒花崗岩)の中には、山腹の途中(しらび平)まで氷河によって運ばれてきたものがあると考えられている。